

**REACTIVE POLYMER COMPOSITION**

**Patent number:** JP61228054  
**Publication date:** 1986-10-11  
**Inventor:** TAKEDA JUNKO; ASANUMA TADASHI  
**Applicant:** MITSUI TOATSU CHEMICALS  
**Classification:**  
- international: C08K5/16; C08K5/34; C08L25/02  
- european:  
**Application number:** JP19850066666 19850401  
**Priority number(s):** JP19850066666 19850401

**Report a data error here**

**Abstract of JP61228054**

**PURPOSE:** A composition which is crosslinked extremely rapidly and becomes insoluble in solvents when it is irradiated with light rays with relatively long wavelength, such as visible light ray, etc., obtained by blending a copolymer containing a vinyl group and/or isopropenyl group with dyestuff such as Methylene Blue, etc. **CONSTITUTION:** (A) A polymer containing  $\geq 0.02$  mol based on the whole mono mer unit of vinyl group and/or isopropenyl group, obtained by copolymerizing divinylbenzene and/or diisopropenylbenzene with another polymerizable monomer is blended with (B) a dyestuff selected from Crystal Violet, Malachite Green, Safranin-T, Rhodamine B, basic Fuchsin, Hofmann's Violet and Methylene Blue. A ratio of the component B to A is  $\geq 0.0001$ , preferably 0.001-0.01.

---

Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

## ⑫ 公開特許公報(A) 昭61-228054

⑬ Int.Cl.<sup>4</sup>C 08 L 25/02  
C 08 K 5/16  
5/34

識別記号

CAC  
CAC

庁内整理番号

7602-4J

⑭ 公開 昭和61年(1986)10月11日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑮ 発明の名称 反応性重合体組成物

⑯ 特 願 昭60-66666

⑰ 出 願 昭60(1985)4月1日

⑱ 発 明 者 武 田 淳 子 富田林市別井94

⑲ 発 明 者 浅 沼 正 高石市取石3-4-1-133

⑳ 出 願 人 三井東圧化学株式会社 東京都千代田区霞が関3丁目2番5号

## 明 細 書

## 1. 発明の名称

反応性重合体組成物

## 2. 特許請求の範囲

1. ジビニルベンゼンおよび/またはジイソプロベニルベンゼンと他の重合性単量体を共重合して得たビニル基および/またはイソプロベニル基含有単量体を全単量体単位の0.02モル比以上含有する重合体とクリスタルバイオレット、マラカイトグリーン、サフラニン-T、ローダミン-B、塩基性フクシン、ホフマンズバイオレット、メチレンブルーからなる群より選ばれた少なくとも1種の色素からなる反応性重合体組成物。

## 3. 発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本発明は反応性重合体組成物に関する。詳しくは、可視光などの比較的長波長の光を照射することによって極めて速かに架橋反応し溶媒に不溶と

なる反応性重合体組成物に関する。

〔従来の技術〕

フォトレジストを初めとして多くの用途に反応性重合体を利用されており、例えばアルリル酸系重合体、スチレン系重合体などがある。その際に架橋反応性の官能基としてエポキシ基、ハロゲン基、炭素-炭素2重結合などを用いた例が知られている。

〔発明が解決しようとする問題点〕

上記した官能基は光感度があまり高くないため、可視光での架橋は起きにくい。

したがって比較的長波長の可視光で反応させる目的で色素などを配合し、その色素を励起し、エネルギー移動により反応性官能基を励起することが行われている。しかしながら、その効果は充分ではなかった。また、反応性官能基自身を比較的共役系の長い複雑な構造とすることによって長波長の可視光の照射で反応性官能基を反応させることが可能であるが、その製造が困難であるという問題があった。